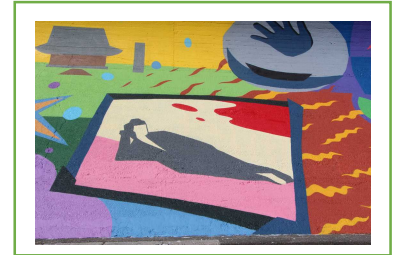


南伊勢の民話 モチーフリスト

① 『寺に寄進した涅槃像の画』 相賀浦

民話：「水難者のたたり」

船乗りたちが、沖合に流れる死体を引き揚げてみると、高野山の寄進する大金を身に付けていた。船乗りたちはその大金だけを盗み取り、死体は水葬し、帰港してからその金を分配してしまった。ただ、その中でカシキ（水夫）をしていた一人だけが分配にあずからなかった。

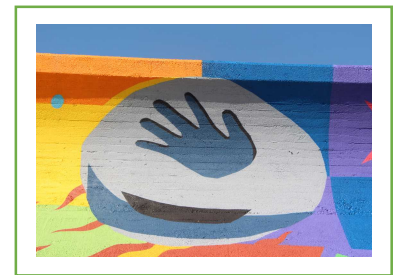


ところがその後、その船が難船し、海のもくずとなったのに、不思議に「カシキ」だけは助かった。「これは高野山の罰があたったのだ」「水難者のたたりだ」など、陰口されたので、その船乗りたちの遺族は、その水難者の霊の供養として、寺に涅槃像の画を寄進した。

② 『五手の石』 礫浦

民話：「^{さざれいし}礫石」

字東出に、天照大神の礫石という四方七寸ばかりの円石が祀られていた。五本指の形のついた霊石で、あちこちにも知られ、船乗りたちの信仰が厚かった。これに祈れば、天候順調で漁獲もあるというので、出漁のとき、また、貨物船の出帆のときは必ず参詣していた。



これを「五手の石」といい、今は八幡神社のご神体として祀られている。神社の合併前は井戸のあるところに祀られていた。そこで子供たちがこの石をころがしているのを見て、そんなものを動かしてはならんと注意した人があったが、その人はかえって病気になってしまったという。

この石は天保元年ごろ一時的に盗まれた。石を載せた船が動かなくなったので、これを海中に捨てたら動くようになった。あとで海から「五手の石」が出てきたので、これが盗まれた石だということになり、また祀られるようになった。また、この石については、次のようにもいわれている。

権現神社のもので、海に捨てられた後、二ツ浜に波で打ち上げられていたという。また、石を積んだ船が台場の沖まで行ったら、船は進まずに後へ帰ってきた。たたりだろうと思い、港へ帰って石を戻したら船は走るようになった。

③ 『夜泣きを止めるしめ縄』 迫間浦

民話：「坊主岩」^{ぼうずいわ}

夜泣岩ともいう。橋氏が迫間浦にやって来て、石谷平兵衛氏を頼った。後に村民を従えて迫間浦の領主になり今の浅間山の地に城を構えたという。

あるときの戦いで手傷を負い、奥座敷でひそかに養生をしていた。そこへどうして知ったのか、道清氏が心配して見舞いにやってきた。ところが、それを敵がやってきたものと勘違いをし、槍をもって追い駆け、坊主岩に追い詰め、そこで突き殺してしまった。後、橋氏はその娘を道清氏に嫁して和睦したという。

道清氏の死んだところへ石を建てて祀った。道清氏は穏やかな人柄で子ども好きだった。そこでここへ洗米を供え、しめ縄を掛けて拝むと子どもの夜泣きを止めてくれるという。

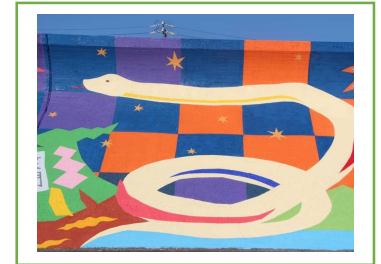


④ 『永福寺の白瀧権現の神札』 押刈

民話：「白瀧」^{しらたき}

袴腰の山中には、昔から白蛇が住んでいた。ところが嘉永元年の春から、押刈内ではいろいろな不思議なことが多く、家々の鶏が宵鳴きをしたり、また、白蛇を見て両目がつぶれた者も出てきた。

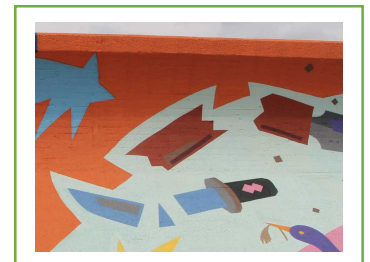
しかもある夜、夢のお告げがあったので、これを白瀧権現としてお祭りしたところ、不思議な事柄が急にやみ、祈祷をすると霊験もあるというので、近辺の大評判となり、山田川崎方面からの参詣人もあるほどになった。ついに慥柄の大庄屋から世間の人を惑わすといって、差し止めの達しがあったので、お参りのことはやんだが、小祠は残った。このとき、永福寺では白瀧権現の神札を発行したほどという。



⑤ 『出土した折れた刀や槍』 始神

民話：「おめきの森」

昔、始神の入口に茶屋があった。その横裏に、用水か飲料のために掘られた横穴があり、子どもたちはコウモリを捕ったりした。その上の山が墓地になっており、昔は物見台（見張り場所）で、強盗や敵が攻めてくるのを見張ったところである。悪者が押し寄せてくるのが見えると、地下（村）へ、「賊が来たぞ！」と大声を出しておめいた（大声で叫んだ）ので、ここをおめきの森と呼んだ。墓地整理のとき、刀や槍の折れたのが出土したと伝えられている。



⑥ 『倭姫命に稲穂を差し上げた鶴』 斎田

民話：「大歳社」^{だいさいしゃ}

斎田に大歳社が祀られていた。今もここに石積みがあって、鶴の墓という。この鶴は霊鶴で、昔ここに住まい、大歳社の使いで稲穂をくわえ、すぐ南の山を越えて磯部へ飛んでいった。鶴の越えていったところから、この山を鶴路岳と呼ぶようになった。

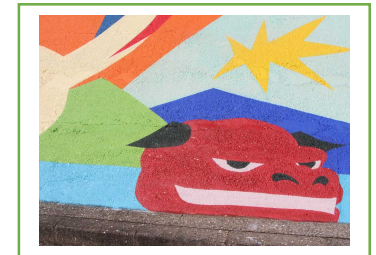


この鶴は磯部で倭姫命（やまとひめのみこと）に稲穂を差し上げ、それから斎田へ戻り、千年の寿を終えて、ここに祀られたという。また一説では、白鶴が一尺余りの大きな稲穂をくわえて飛んできて、その稲穂を大歳の地に落としていった。村人は、その穂は神様がくださったありがたい穂だといって種子をまき、子孫へ伝えることにした。また、その白鶴の霊を慰めるために、穂を落としたところには小さな碑を建て、その鶴がいつ来ても食べられるようにと、田に稲を植えて長く伝えるようにしたという。

『大水で流れ着いた立派な獅子頭』 斎田

民話：「流れ着いた獅子頭」^{ししがしら}

斎田で大雨が降った。田畑をすっかり埋めていたが、朝日とともに引きはじめ不思議なことに、どこからともなくジロジロチンチンドンと笛と太鼓の音が聞こえてくる。



村人は音のする方へたどっていくと、釜の口（現在の神勢工業のある付近）のヨシの中から聞こえるので、恐る恐る近づくと、立派な獅子頭が昨夜の大水で流れ着いていた。

村人たちはそれを大切に運び、庄屋さんは地下中の人を集めて相談したところ、まず、持主を探すことになり、方々へ連絡した。ようやく持主がわかり、田丸在の野篠村のもであった。ドロボウがお金になるものと思い込み、盗み出し押湊まで運んできたが、重いため川辺の草原に捨てたのが、大水で流れついたのであった。

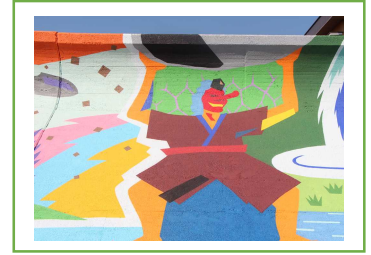
知らせを受けた野篠村の人々が、はるばる山を越えて受け取りにきた。お礼を言い、獅子頭を持ち上げようとしたが、吸い付いたように重く、持ち上げることができない。力自慢の人たちが、代わる代わる試してもなかなか動かない。しかし、斎田の人が持ち上げると、軽々と持ち上がる。これは正直な斎田村の方々へ、神様が授けてくださったのだから、末永く大事に祀ってくれ、と言って、野篠の村人たちは帰って行った。

舞方や囃方の知らない斎田の人々は、野篠村に出向いて教わってきた。それからは、村に悪い病気や争いごとがなくなり、村はますます繁盛したという。

⑦ 『力自慢の岩を運ぶ天狗』 伊勢路

民話：「^{きょうじゃやま}行者山の^{てんぐ}天狗」

昔、伊勢路の行者山に天狗が住んでいて、なんでもできると力自慢をしていた。奥出の奥の田は、温坊山の麓を開墾してつくった段々の田であるので岩が多く、村人たちは耕作に大変困っていた。



天狗の自慢話をたよりに、百姓たちが相談のうえ、天狗に田の中の岩を残らず取り除けてくれるように頼んだ。親切な天狗はこころよく引き受けてくれて、「あしたの朝、一番鶏の鳴くまでに間違いなく取り除けてやる」と固く約束した。

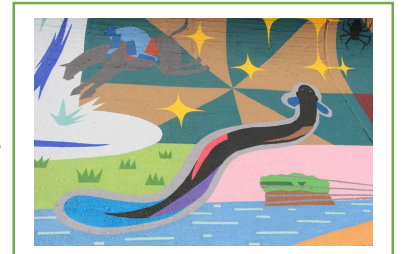
百姓たちが仕事を終えたあと、さっそく仕事に取りかかり次々に岩を運ぶが、運んでも運んでも田の中の岩は尽きない。空も白みかけ、ようやくあとわずかとなったとき、大岩立尾の岩と多滝谷の岩を担ったが、荷加減が悪く、そばにあった枕のような形の岩を添えて担ったところ、コロリと転げ落ちてしまった。

その時コケッコーと鶏が時刻を告げた。百姓たちとの約束が果たせなかった天狗は、責任を感じてか、行者岩からその日限り姿を消してしまった。しかし、奥出の田は岩のない美田となった。川の真ん中の岩は長持岩と呼ばれている。

⑧ 『池の主うなぎ』 内瀬

民話：「^{すいじんいけ}水神池と^{げんた}源太」

昔、伊勢路川は今の浜の前をとおって、水神池へと流れていた。今よりはずっと大きく、底もはかり知れない深さをもっており、気味悪いところだった。ここの池の主といわれる「うなぎ」が住んでいた。雨の降る夜は童女となって、池の表面によく現れたそう。



その池のそばに源太という勇敢な男が住んでいて、ある夜に源太は夢をみた。池の主が美しい娘の姿で現れ、「明日、鶴路山に住む大きな毒グモが、水神を襲ってくるので、私一人だけでは太刀打ちできないから力になってほしい」と頼んだ。源太がうなずくと、「戦いになったらこころあいをみて、『源太ここにあり』と大声でどなってほしい」と言った。源太がもう一度うなずいたところで、夢から覚めた。

翌日、約束の時がきた。その夜は、水神池の上を生臭い風が吹いて気味の悪い夜だった。源太は恐ろしかったが、約束をしたので水神池のほとりで待っていた。

そのうち夜もふけると、鶴路山の上で大きな目玉のようなものが二つ、異様に光り、にわかに一面の黒雲がわき起こって、すごい速さで水神池へ襲ってきた。これに対し、水神池からは太い水柱が立ち上がり、ここに黒雲と水柱が入り乱れ、大雷鳴となった。かなり勇気のあった源太も恐怖のあまり、「源太ここにあり」というのを忘れてしまい、はうようにして家へ帰って寝てしまった。

⑨ 『白馬に乗った朝比奈三郎』 船越

民話：「白馬の白瀧」

龍仙山の裏側稲石にある。朝比奈三郎という侍が、白馬に乗ってここを通りかかり、誤って乗馬のまま道の下の瀧つぼに落ちて死んでしまった。一説では敵に攻めたてられ、かなわなくなって、白馬にまたがったまま、瀧つぼに入水してしまったともいう。

それからは、この瀧の付近を通ると、白馬が瀧つぼに浮いて見えたり、また、大晦日の夜になると、白馬がこの辺りを駆け巡るようにもなった。そこで、白馬瀧、駆け足瀧と呼ばれるようになったが、それらを見た人は必ず若死にするといわれる。

伊勢路の奥に、踏掛、倉掛、的場などという地名があるが、そこは朝比奈三郎の修行の地といわれる。



⑩ 『島を網にかけて引っ張った』 中津浜浦

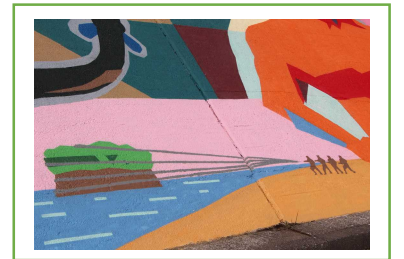
民話：「茶臼島」

海の真ん中にポツンとある島で、今、中津浜浦の弁天さんが祀られている。呼びやすいように「ツブリコ」となったというが「ツンブリコ」とも呼ばれる。古い地図では、「ツラコシマ」

「ツツラ小島」「ツツ島」などとある。『村誌』に「大漁島」とあるように、この辺りは良い漁場であった。

中津浜浦と五ヶ所浦とは、海面の取り合いから、お互いにこの島をおれのものだと言い張って譲ろうとしなかった。とうとう中津浜浦は「そんなにいなら、この島持っていったらよかんこ」といった。それで五ヶ所浦がまいってしまったんだと伝えられる。

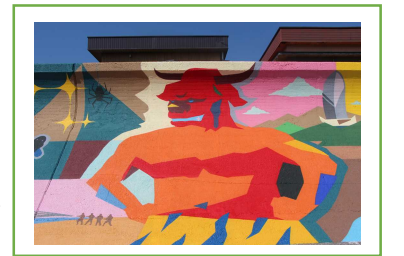
一説では、そこで五ヶ所浦は島に網を付けて引っ張ったのだという。島の頭の方がちょっとだけ五ヶ所浦の方へ傾いているのは、そのためなのだといわれる。



⑪ 『首から上は牛の頭 五ヶ所城の守護』 五ヶ所浦

民話：「牛鬼」

五ヶ所浦の切間の谷に一つの洞穴がある。ここに牛鬼という変わったものが住んでいた。牛鬼とは、古本『勢摩軍記』では、毎月牛一匹を食う鬼だったというが、後の本では、首から上は牛の頭をし、人間のようにものを言い、一日に千里も走る通力をもった強い鬼だったという。この牛鬼は、よく西山に出てきて、五ヶ所城の殿様（愛洲重明公）が城中で弓の稽古をするのを眺めていた。ところがある日、弓自慢の殿様が、あろうことか、その矢を牛鬼にめがけて放してしまった。矢は牛鬼の胸元へ当たり、牛鬼は西山の下の方へ真っ逆さまに転び落ちた。



このときの牛鬼の泣き声はすさまじく、そのうえ、真黒な煙がもうもうと立ち上った。この煙にむせんだ城主の奥方（後の本では浮舟とある）は毒氣にあてられ、治らぬ業病をわずらうことになった。そのため、親元の北畠家へ養生という口実で帰され、あとから離縁を申し送られ、奥方はそれを悲しんで自害してしまった。

この非道を怒った北畠家は、ついに軍を起こし、とうとう愛洲家は滅ぼされた。この牛鬼というのは、もともと五ヶ所城の主（守護ともいう）だったそうで、死に際に「自分を助けておけば、この城は末永く繁昌するものを」と言い残したという。

『老翁になったクモ』 五ヶ所浦

民話：「剣祖 愛洲移香斎」

今からおそよ550年ほど前、日本が戦国時代であったころ。伊勢愛洲氏出身の移香斎は武者修行のため、日本中を旅していた。そして30余歳のとき、日向国の鵜戸大権現（現在の宮崎県鵜戸神宮）に着いた。



そこで移香斎は鵜戸大権現の洞窟のなかで香を焚き、祈禱を始めた。声一つない静けさの中で祈禱を行っていた21日目の明け方、ユラユラと影が揺らめいてクモが突然目の前に降りてきた。このクモを払いのけようとしても、つかんでおさえようとしても散り散りに四散して、つかめない。その変幻自在の様子をみて、ついに移香斎はひとつの閃きを得た。

すると奇怪なことに、そのクモが老翁に変わった。老翁はこれを『陰流（影流）』と呼び、世の中に広めるようにと移香斎をさとしたという。

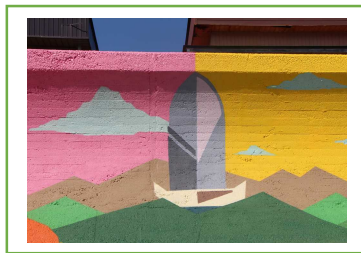
こうして開眼された陰流は、後の世にタイ捨流、柳生新陰流など、200余の流派を産むこととなり、のちに愛洲移香斎は剣祖と呼ばれるようになった。

⑫ 『剣のような岩塊』 切原

民話：「剣峠」

明治22年、ここに伊勢への通じる道ができた。八咫宜山の尾根に剣のような岩塊のあるところから、その名がでたという。

ある新聞に、「天照大神がここより熊野の海を見てあまりの美しさに剣を落とされたから」とあったが、その出所は不明である。



ここは、敗戦後、村上元三が新聞に連載した『佐々木小次郎』に登場する。ここでは、小次郎が宇治の楠部太夫の家に宿泊しているころ、その娘おまんを鞍に寄せ、大場甚内一味の追撃を避けて、払暁の五ヶ所街道を南下する際、一時傷の手当をするために休憩した地としている。そのためか、一時ここにある小池のそばに、佐々木小次郎が血刀を洗った池と掲示があったと聞かすが、小説にはそんな描写はない。まもなく撤去されたのか、その後、この伝承を聞かない。

⑬ 『波にさらわれ打ち上げられた釜と米』 飯満

民話：「地名のいわれ」

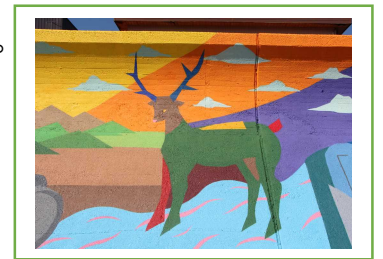
昔、倭姫命が天照大神を奉じて各地をまわらされたとき、この海岸へ立ち寄られた。海辺の南崎で休まれご飯の仕度にかかった。釜でご飯を炊いていると大波が打ち寄せてきて、炊いていたご飯をさらって行ってしまった。だが、二度目の波でそれが打ち寄せられ、浜一面にご飯が打ち上げられてしまった。それで「ご飯が満ちる」といって、「飯満」といわれるようになったのだといわれる。この浜からは、米石といって米粒がいくつも固まったような珍しい石が拾われる。



⑭ 『シカ岩のシカ』 泉

民話：「三本松」

三本松のところは、平生近寄ってはならぬといわれていた。ところが、ある人が休みの日にここへ出かけてみたら、大きなシカが出てきていた。これから「シカ岩」といわれるようになった。

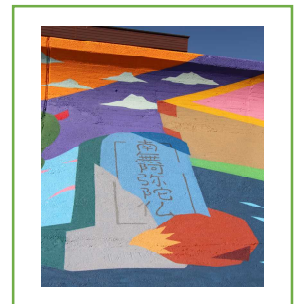


⑮ 『キツネ』 神津佐

民話：「キツネ封じ」

昔、「おさだギツネ」というキツネがいた。身体の弱い人を見るとよく取りついた。取りつかれた人は、わめいたり、歌いだしたり、奇妙なしぐさをする。村人たちはキツネに取りつかれた人が死ぬと、キツネがそのはらわたを食べるのだといって怖がっていた。

そのころ、神津佐に徳住という坊さんがやってきて、村人がキツネに取りつかれて困っているのを見て、「おれがキツネを封じてやる」といって、大きな「南無阿弥陀仏」という石碑を建て、墓参りごとに地下中にお参りをさせ、また、毎月旧15日の晩、各組ごとに「南無阿弥陀仏」の掛図を掛け、線香一本が燃えるあいだ、念仏を唱えさせるようにしたら、キツネはいなくなったという（聞書）。



①⑥ 『一升枅』 下津浦

民話：「飛枅大明神」

享保年間、下津浦の里から出火し、集落の大半を焼失した。このとき、寺も一部類焼したが、そのどさくさに寺の米びつにあった一升枅が行方不明 になってしまった。枅が米びつから抜け出すのは不思議なこととされたが、その火事の後始末をしていると、峠畑の茶の木の根元で見つかった。あまりの不思議さに、村人たちは、火伏せの神の秋葉神社のご神体にし、「飛枅大明神」といって、床浦に祀ることにした（聞書）。



①⑦ 『平氏の公達が弾いた琴』 木谷

民話：「琴ヶ島」

寿永の昔、平氏が西海から落ちのび木谷浦へ隠棲したが、風流を尊んだ公達が、月夜に舟を浮かべてはこの島へ渡り、琴を弾いたというところからその名がついた。

「行こか木谷へ、帰ろか宿へ、ここが試案の琴が島」という俗謡がある。

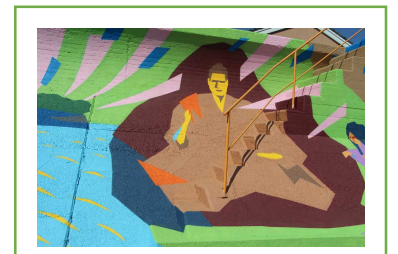


①⑧ 『引き上げられた薬師像』 宿浦

民話：「宿浦の薬師さん」

昔、竈に小平という貧しい漁師がいた。ある日、いつものように小舟で沖へ出漁したのに、晩になっても帰ってこなかった。その日は、ことに海上も穏やかな日だったので、難船は考えられず、郷民も不思議に思いながら、八方探したものの、ついに行方は分からなかった。小平には、若い妻と一人の乳飲み児、そして年老いた母があった。妻は悲嘆のあまり乳がとまってしまった。老母は朝早く海辺に出て、小平の無事を祈っていた。

ある朝、桂島の魚江あたりを見ると、異様なものの漂うのを見つけた。早速、これを村の人たちに知らせ、田曾浦の浜へ揚げようとしたが、一向に揚がろうとしない。手をかえて宿浦の浜で揚げようとしても揚がる気配はない。観音洞へまわして揚げようとしたが、千鈞の重みが加わり、ますます揚がろうともしない。皆が途方に暮れているところへ、小平の老母がやってきて手をかけたら、不思議にも楽々と揚がってきた。見ると薬師像だった。 皆はさっそくに堂を建ててこれを安置した。そしてこれは小平の老母の厚い仏心の賜物だとしたが、そのおかげか、若い妻の乳も日にならずして出るようになった。



この薬師像は、このように感応の靈験著しく、一名、乳薬師如来と称され、皆の崇敬を集めた。ここに侵食されて穴のあいた岩があって、観音洞といわれた。観音洞とは薬師がここに漂着したので、名がついたといわれるが、埋め立てのため今はもう見られない。

①9 『女の幽霊』 田曾浦

民話：「城山コモンソの松」

いつのころか、田曾の城山の城主に仕える小姓があった。日頃は忠実な者であったが、どうしても、ふとして城主の不興をかい横死を遂げてしまった。後になって、その事実を知った城主は、その小姓を哀れみ、墓所に松を植えて菩提を弔ったので、その松は「子小姓松」と呼ばれたが、いつしか転訛して「コモンソ松」となった。

その松は明治の中頃まであった。三本松のところにあったが、その三本松も長く入船の目標であったが今はない。

その三本松の真ん中の木の下には、女の首が埋められていた。ふとしたことから罰を受けたので、夜になると幽霊となって出たともいう。

